Experience of aphasia understood through patient narratives : focusing on the doubts about one's language and the coping behavior of patients

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yamada, Rie メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/19523

平成 20 年 8 月 20 日

博士　論文審査結果報告書

報告番号　医博甲第 1988 号

学籍番号

氏　　名　山田　理絵

論文審査員

主　査（職名）泉　キヨ子（教授）　印

副　査（職名）長谷川雅美（教授）　印

副　査（職名）稲垣美智子（教授）　印

論文題名

Experience of aphasia understood through patient narratives

－focusing on the doubts about one's language and the coping behavior of patients－

（当事者の語りにみる失語症という体験－自らの言葉への疑いとその対処行動に焦点を当てて－）

論文審査結果

論文内容の要旨

本研究は失語症者の語りを通して身近な対人関係における対処行動を明らかにし，失語症者の看護援助の示唆を得ることを目的とした。方法はSpradleyのエスノグラフィを基にした質的記述研究デザインを用いた。参加者は，地域で生活している中等度～軽度の失語症者16名である。

その結果、失語症者は《自らの言葉への疑い》に揺れ動く不安な状態にあった。この不安を経て，言葉の不自由さを認識し対処行動に至る場合もあれば，この認識には至らず対処行動がとりにくい場合もあった。認識の背景には【健常者には言葉が通じない】【誰も相手にしてくれない】【周囲に指摘され言葉の問題に気付く】という体験が関係していた。《自らの言葉への疑い》に揺れ動き言葉の不自由さを認識した後，【元の言葉に近付きたいと願う】【工夫して言葉の弱みをカバーする】【言葉の弱みを伝え協力を得る】【失語にも関わらず通じ合えると信じる】【病前と変わらない面を強調する】の対処行動が現れた。対処行動が成功した場合は家族や友人，患者会という限られた三者に対し【周りの支えがありがたい】と感謝し，成功しない場合には【失語になったことは仕方がない】と開き直る語りも見られた。以上から、これらの対処行動を活用することで失語症者との効果的なかかわりや看護援助に発展できることが示唆された。

審査結果の要旨

本論文は語りを通した失語症者の体験から失語症者の身近な対人関係における対処行動を明らかにしたことが独創的である。今回取り出した対処行動はさまざまに地域で生活している失語症者の理解や援助に活用できる。公開審査では分析の信頼性の確保、本研究の活用性、失語症のタイプによる違いについての質疑応答があったが、その内容，態度は概ね的確かつ論理的であった。

以上より，本論文が博士（保健学）の学位を授与するに値すると評価し、保健学における研究を自立して行うことに必要な研究能力を有すると認め，論文審査を合格と評価した。